

令和5年度 第3回 松本「シンカ」推進会議 会議録

日時：令和6年3月7日（木）
午後3時00分～
オンライン会議

（※欠席委員：宮澤委員、清水委員、鬼頭委員）

1 開会

2 座長あいさつ

3 議題

(1) 前回の検討内容の振り返り

事務局から説明 ※特に質疑等なし

(2) 自然×シンカの取組みについて

課題① グリーンインフラの推進について

課題② サイクルツーリズムの推進について

※冒頭、各課題について前回会議で出された意見に対する市の見解・取組み状況を各関係課から説明

〔課題①に関する主な意見〕

- ◆ 花のプランターを、駅からあがたの森、駅から松本城まで並べたい。街なかにおいては、ポイントだけでやるのではなく、面で行った方が良いと考えている。
- ◆ 花いっぱい運動に限ったことではないが、町会や組合などの従来の団体に頼るやり方は難しくなっている。今の街なかの状況を見ても店舗が個々なので、個々を結び付けていくことが大事。みんなで盛り上げていくための市民一人ひとりに投げかけていくような施策やイベントを通じ、隣がきれいな花を飾っているから自分もやりたいと個人個人がそういったマインドになっていくようにシフトしていく必要がある。
- ◆ 防災や空き家対策の観点から、トライアングルエリアにたくさんある空き家を上手く活用できないかと思っている。観光客の方が写真を撮って SNS にアップしてくれるようなものを整備してはどうか。
- ◆ 里山整備に関して、美鈴湖付近の森林で、子どものために使っていいという場所があり、保育園の保護者と子どもたちが定期的に山整備をしている。里山を所有している方で、管理に困っているという山は沢山あると思うので、市民参加という点では、このような教育、保育の一環での活用の仕方を考えてもいい。
- ◆ 人間だけでなく、色々な生物と関わりながら生きているということを大前提としたグリーンインフラという考え方が必要だと思っている。自然との関わりを「共生」という言葉で理解できるといい。
- ◆ 里山の活用は、農業と一体的に考える必要がある。そうしないと里山の一体管理、里山を網羅できない。

- ◆ 街路樹の落ち葉は資源化していきたいと考えているが、産廃であるため、運搬には資格が必要で業者が簡単に運べない。時間はかかるかもしれないが、教育的な観点から、落ち葉を堆肥化してプランターの土として実際に使うことで「循環」の意味合いがリアルに分かるのではないか。
- ◆ 街にいると見えにくいですが、実は自然と街は繋がっている。サーキュラエコノミーという言葉で色々なところで取り組みがあるが、グリーンインフラ推進に当たっては、街単体で考えるのではなく、自然と繋がっていることが分かる仕組みがあるといい。
- ◆ 「グリーンインフラ」といった時に、単に緑の量がどのくらいなのかということより、種類や場所、目的、使われ方など、色々な意味での越境として、全体でグリーンインフラという入り口から価値をつくっていく仕組みのようなものを、つくっていく視点が重要ではないか。
- ◆ どんな緑を整備するかといったときに、見るだけの緑に比べ、食べられる緑はより自分の体に近くなってくる。すなわち生活の中に入ってくるという部分で、そういう視点で考えてもいい。
- ◆ 地元産材の活用の点では、家や事務所のフローリングにカラマツを率先して使っているが非常に性能が良い。CO2 を使って中国やカナダから輸入した木材を使うよりは、長野県産のカラマツをみんながもっと利用できるようにする。市の事業でもカラマツを使っていくことでもっと公的な信頼性が上がっていくと思う。
- ◆ 東京おもちゃ美術館の0歳児用の部屋は厚さ4センチくらいの木は無垢材で作られていて、乳児が入ると落ち着く、泣き止むという話があった。県内産のカラマツについても、保育所で使うとか、プロモーションに使っても良いのではないか。
- ◆ 街なかにベンチを置くということを松本市は率先して行っているが、他の自治体では私有地に地元産材を使ったベンチを置くことに補助を出すという事例もある。民地にベンチがあると近所の方も使用するので会話が始まり、それが地域住民の繋がりになる効果もあると聞いている。松本の街なかをより歩きやすくする取組みとして検討してほしい。

〔課題②に関する主な意見〕

- ◆ 松本の市街地は自転車で出かける方が多く、中には車いす代わりにする人もいる。そうすると市内の自転車が通れる道は厳しい状況。143号線のところで、中町からナワテに抜ける道が歩行すら危険。国道なので松本市が責任をもってということではないが、その他の道路の整備についても、課題として検討していただくとありがたい。車いす利用者が散策する際、中町は歩道が整備されていて通りやすい。
- ◆ グーグルで「松本市」「サイクルツーリズム」と検索しても松本市のHP、PDF ファイルくらいしか出てこない。まずは、そういった部分の整備も必要。
- ◆ 県外の事例として和歌山県の「WAKAYAMA 800」というサイクリングルートがあるが、海外の人に浸透して9か国語に対応しているYouTubeがあり、紹介動画は英語とフランス語でやっている。
- ◆ 松本市は魅力の部分と潜在的な課題がうやむやになっている。市街地は道が狭く、ま

た、各地域を結ぶ幹線道路も一つしかない。例えば、松本城を観た後に乗鞍まで自転車だけで行くのは難しい。アルピコ交通との連携が喫緊の課題だと思う。

- ◆ ガイド付きで農村地区を巡る、岐阜県の「SATOYAMA EXPERIENCE」というツアーの取組みも参考になる。整備とPRは両輪で進めた方が良いと思っている。
- ◆ 市民感覚としては、街なかでの自転車施策は、中高生の自転車が多く危険。愛好家に楽しんでもらうコースは、芥子坊主や美ヶ原、入山辺など周辺に絞った方が良い。広い市域を活かし、どんな人たちにどこを楽しんでもらえるかという視点からマーケティング戦略が出てくるのでは。海外なら、例えば台湾の方とか。具体的に国を想定して観光戦略と絡めながら進めた方が良いと思う。
- ◆ 市街地の駐輪場は鉄とコンクリートばかりでありあまり美しくない。また、隣の自転車とぶつからずに止めることができないのもストレス。効率ばかりを求めず、もう少しスペースにゆとりを持たせ、例えば藤棚の下に駐輪スペースを設置するなど、自転車に乗ってきた人がちょっと休めるとか、そんなイメージの駐輪場がいっぱい点在していると良い。その際には空き家を改修して活用できないか。既に天井・扉・壁もある。
- ◆ 市街地での自転車道整備はハードルが高いので、実現は難しいかもしれないが、河川を使ったサイクルロードというのはどうか。水が少ないときに自転車用道路として使えるよう交通網を整備する。市内は川が入り組んでいるので、信号もなく、スムーズに通行できるのでは。
- ◆ 松本市が目指すべきは、自転車を活用した広域観光、周辺の観光ではないかと思っている。昨年から安曇野市の依頼を受け市民がどれだけ自転車を活用しているか調べているが、せっかく自転車ルートがあっても、市民がほとんど活用していないという実態がある。松本市の「絶景巡りコース」も非常に美しいコースだが、あまり知られていない。つくったら終わりではなく、どう広げていくのかがこれからの課題。安曇野市や塩尻市を巻き込んで、観光客であれば広域での滞在、市民に対しては、「週末は自転車に乗ろう！」というような市民の機運を高めるプロモーションがあったらいいのではないか。
- ◆ 自転車は単なる移動手段としてだけではお金が落ちないという話もあったが、宿泊と結び付けるため、アドベンチャートラベルの一つの要素として組み込んだ方が良い。
- ◆ 自転車ではお金が落ちないという問題については、思い切ってチャージ＝使用税を取っても良いのではないか。海外の人は払うと思う。それを財源にして今後の環境整備につなげるとか、地域の活性促進に使用する。
- ◆ マウンテンバイクにも注目したい。森林整備を兼ねて、山を有効活用するという発想もある。鈴木雷太さんの活動などで、大勢の方が山に入っている。一般の方にはあまり知られていないこういう部分をオープンにしていくことも面白いのではないか。
- ◆ 特に高級な自転車に乗っている方々は、市街地に保管場所がないため、どこにも寄れないという問題がある。解決策として、博物館や美術館などの管内の入り口に有料の駐輪スペースをつくってはどうか。サイクリストの人たちも安心して置いておけるし、松本がそういったまちであるというイメージ付けにもつながる。

〔座長まとめ〕

- ◆ グリーンインフラについては、単に緑の量がどのくらいあるのかということに重視するより、種類や場所、目的、使われ方など、色々な意味において全体で「グリーンインフラ」という入り口から価値を生み出していく仕組みのようなものを、つくっていく視点が重要ではないか。
- ◆ どういった緑を整備するのかといったときに、例えば、見るだけの緑に比べ、食べられる緑だと、より自分の体に近くなってくるという感覚。もう少し普段の生活の中に入ってくる緑を増やすという視点もあるのではないか。
- ◆ 自転車で走っている人、特に海外の人からしたら行政域など全く意識しないとは思いますが、自治体同士お互いに相乗効果を出せるところは積極的に考えてもいい。
- ◆ こだわりたいのが、「日常」と「非日常」。サイクルツーリズムで言えば、松本に関わりが深い人達が普段から自転車と近いところで生活をしているような環境や土壌があって、その上で国内有数の自転車レースがあるというような状況。年に1回だけ大会があって、その関係者だけが自転車のまちとして認識しているが、住んでいるほとんどの人は意識がないというのはどうかと思う。音楽で例えれば、日常的に音楽を楽しむ土壌があって、セイジ・オザワ松本フェスティバルという世界的な音楽祭があるようなもの。日常があってこそその非日常であり、それはグリーンインフラにもサイクルツーリズムにも言える。暮らしている市民の方が幸せに感じ、地域に愛着があって満足している状況がないと、嘘っぽくなってしまう。そういう魅力をつくっていくことが必要だと感じた。

(3) その他 . . . 特になし

4 閉会

次年度の会議については事務局から改めて連絡